

方向音痴

旭川医科大学医師会
札幌禎心会病院

いわさき
岩崎

ひろし
寛

私は、どうも生来の方向音痴らしい。地下から地上に出た時、学会での会場を移動する時、ホテルへ帰る時など、いろいろな場面で実感することがこれまで多くあった。特に、アメリカに留学していたおよそ35年前にワシントンD.C.での国際学会に出席して会議場からスミソニアン博物館にある懇親会場へ、札幌医大の教授を含めて日本からの多くの先生方を自信満々で道案内していたが、全く方向がずれていて、冷や汗をかきながら何とかたどり着いたことが思い出される。当時、その付近を家族で事前に何回も散策していたし、ましてや宿泊していたホテルから会議場もスミソニアン博物館までの道のりも熟知していたと思っていたので相当ショックであったことを苦い記憶として残っている。

ところで、方向音痴を検索してみると、方向音痴とは、方向・方角に関する感覚の劣る人のことをいい、自身のいる位置を見失いがちな性質のある人のことを指すようである。その特徴が7つ挙げられ、①周りをあまり見ない、②もと来た道に戻ろうとして、さらに迷う、③地図の見方がわからない、④興味のある物ばかりが視界に入る、⑤一日に何度も人に道を尋ねる、⑥楽観的な人が多い、⑦何度か迷う度に学習する、となっていた。まとめると、方向音痴の人は、普段から道や行くべき場所を調べる習慣がなく、事前調査もあまりせず、地図も見ているふり程度であるとのことようです。個人的にこれらがどの程度当てはまるかどうかは主観的には判断しがたいが、当たっているような気もする。方向音痴を克服する方法も検索すると、①地図を見て移動する機会を増やす、②現在地を常に把握する、③位置関係を頭に入れる、④地図を描いてみるなどとされている。さらに解決策としては、①マップアプリを用いる、②太陽や風を感じる、③遠回りでも自分にとって覚えやすい道を選ぶ、④迷ったらとにかく振出しに戻る、⑤土地勘のある人を連れていくとある。この中で、現在の現実的解決策としてはGPSによる位置情報やナビゲーションを利用することであると感じる。

実際、車を運転していて目的地をナビにて案内してもらおうと国内外を問わず運転は何とも安心である。今から約35年前にアメリカに留学していた時にはカーナビなど全くない時代であったが、車での旅行前にAAA（トリプルエー）というJAFみたいなところに行って、目的地を言うと、そこまでの道路

案内マップをくれて、それを頼りにパラパラと紙芝居のようにめくっていくことによりたやすく目的地に到着できた記憶がある。さらに、この留学時に夏休みとして2週間レンタカーにて家族でドイツ（フランクフルト空港）から、スイス、フランス、そしてオーストリア（ウィーン）まで宿泊先も決めずに道路マップを頼りにアウトバーンを走ったが、ミュンヘンの市街地以外で道に迷ったことはなかったように記憶している。このことを妻に話をすると、私の方向音痴を補うために、助手席での私の助言がそうさせたのですと反論された。確かに妻の適切なナビが効果的であったことに反論の余地はないようである。

さて、札幌医大卒業後の進路として当初腹部外科に進もうかと考えていたが、迷って救急集中治療ができるようになる麻酔科を選択し取り敢えず麻酔科標榜医の資格を取ろうと決めた。その後、いろいろな岐路はあったが、麻酔科を続けてアメリカ留学にて基礎実験の面白さを実感し、大学に戻った後も継続していた。そのお陰かどうか分からないが旭川医大の教授として赴任し16年余過ごすことになった。その後の道のりは、それなりに紆余曲折があったが無事に定年退官し、現在の病院にて臨床麻酔と緩和にて7年余臨床医として仕事をさせていただいている。

人生にGPS付きのナビはありませんが、私のこの経路が方向音痴由来だったのかどうか判断しかねている。しかし、方向音痴であるがゆえに、医師としての進路については少し回り道をしたり意外な出会いがあったりしたような気がしている。

昨年11月に久しぶりに京都の学会に参加し、さらに天気も気候も良く、紅葉のとても美しい時期でもあったので、ホテルの周りや鴨川をジョギングしてとても爽快な気分であったが、やはり当初の目的と異なる寺院に迷い込み、ホテルまでの帰路が分からなくなり道行く人に訪ねる必要があった。やはり、私の方向音痴は治らないようなので、これからの人生も妻のナビに頼らざるを得ない感じである。

